



障害と

共に生きる

川内町身障協助会

会長 日野 一雄

あれは大正十三年二月、私が満六歳の頃のことでした。「四月に桜の花が咲いたら、小学校へ行ける。」このことは、幼かった私にとっても楽しみなことでした。

ところが、入学直前の部落学芸会の当日、突然ある病が私を襲ったのです。それまでとても元気だった私にとって考えてもいないことでした。「慢性骨髄骨膜炎」これが私の病名でした。詳しくはわかりませんが、骨の髄が腐っていく病気で、しかも、その症状は身体の中の部分に発症するのかさえわからない、とてもやっかいなものでした。楽しみにしていた小学校への入学はおろか命さえ危ない状態でした。それから三ヶ月間は、入院そして手術の連続であり、この間の痛みや苦しきは筆舌に尽くし難いものでした。

結局、一年の間に私の左下腿と左眼は重度の障害をもつこととなり、私は障害児として一年遅れて入学することになりました。(現在でも骨を除去した方の左下腿はクニャクニャの状態であり、骨を削り取った左眼は陥没した状態のままです。)

中 略
なんとか高校を卒業し、今度は就職です。在

学中も大変でしたが、障害者ということもあり就職にも大変困りました。

シン仕立て業へ弟子入りをしました。その頃の食事といえば、何日も立った御飯に古くなったたくあんというような粗末なものでした。世間の風は自分が思っていた以上に冷たいということを実感いたしました。

仕事も一人前になった頃には、松山祭りの最中などは、三日間も寝ないで仕事をした事もありましたし、年末は四日間位二時間の睡眠、また大晦日は毎年一睡もしない事がありました。今になって思う事は、若いからできた事であって、家を出る前に苦悩があったからこのような辛抱ができたのだと思います。また、逆にいえば、私に障害があったから乗り越えられたのかも知れません。

結婚して家庭を持った後も健常者の社会の事で皆んなと同じ生活をするのはいかに大変だという事も分かりました。毎日毎日の積み重ねです。人並以上の努力だけだと私は思います。

今回、紹介させて頂いた原稿は、去年十一月に川内町身障協助会との交流会で日野会長さんが講演なさった原稿のほんの一部です。

会長さんが、障害者として社会の中で生活なさってくるまでには並大抵の努力、苦悩でなかつた事と思われまます。

毎年定例の行事として協助会の皆さんと交流会を開く事となり、当ホームの入所者の方にも社会で活躍されている皆さんの後ろ姿を見ていろいろなる事を学ばれていることと思います。



ハートを大切に

川内町役場

福祉課

渡部 清美

福祉担当になり、早四年が過ぎようとしています。そんな私が直接窓口で、障害者の方やご家族の方々とお話をする中で、障害をもっているながらその人の生き方に感動をしたり、涙を一緒に流したりとケースを扱わせていただく中で、多くの事を学び得る事が出来ました。その反面あの時勇気を出してもう少し判りやすく説明してあげればよかったのではとか後で、反省する事が度々あります。

身体障害者福祉法の一部が改正され、平成五年四月からは、市町村が在宅福祉、施設福祉の一元の実施主体として、各種サービスが総合的に町村に移譲される予定になっているので今以上に、窓口での係わりやふれあいが多くなり関係者の方々には、ご迷惑をおかけする様な事があるのではと思いますが、最も大切な事は、仕事をさせていただく中で「今何を必要とし、どうしてあげればその人にとっていいのか」という事を適切にアドバイスできる様に常に心がけるようにしていますので遠慮なく声をかけて下さい。ハートで一人一人の方に接していくよう頑張りますのでよろしくお願い致します。